

第四章 博士の日常生活

一、博士の健康

注目すべき博士の日常生活上の事項

博士の人格、其の偉大なる人格を經緯せる幾多の功業と、多種多様の詞藻及び技藝とを叙述し、茲に博士の光輝ある六十年史は、愈終局に近づいたのである。今最後の頁を藉りて、聊か博士が日常生活上二三の事項を摘録し、以つて各編に漏れたるところを補はねばならぬ。

生活の基礎たる博士の健康

少年時代より経験せる疾病

其の第一に逸すべからざるは、博士の健康である。碩儒石菴先生を祖父とし、幕臣勿堂先生を父として、徳川幕政の末期に生れたる博士は、所謂武士の兒として、幼少より體力の鍛練を怠らなかつた。博士は少年時代には、虚弱と云ふほどではないが、決して抗強と云ふ體質ではなかつた。時に病臥せるを傳へらるゝも、病氣らしき病氣に罹つたことはない。僅に大學卒業間際に、右手の中指を怪我して、京都府に赴官する以前に、病院に入つて手術をうけたこと、明治二十八年末より翌年正月にかけて、約四十日、腸窒扶斯のため臥床したことゝがある。然も前者は外科的疾

勝れて發
達せる二
官能博士
の視覺

患であつて、元來の體質上に關係なく、且つ其の後大正五年に流感に冒されたが、これとて十日間の休養で全治したのであるから、ともに問題とするには足らぬのである。

博士の健康は、斯様に一般的に良好であるが、其の最も勝れて發達せる官能は視覺と聽覺とである。視覺に就いては、往年日比博士とともに日本木材の抗張試験を行へる際に、其の優秀を示すを得た。當時試験場の光線が不充分であつて、顯微鏡でリージョンクを取ることは、日比助教授も他の助手も出來なかつたに拘らず、博士は顯微鏡を擔任して充分に實驗を行ひ得たといふ。還曆前博士は十五度の近視の眼鏡を用ひて居たが、それでもなほ月明の夜に、燈火の助けなくして新聞の五號活字を讀むに困難を感じなかつた。此の視覺の發達が、微細な實驗はもとより、繪畫を學ぶ上に於いても非常に役立つて來たのである。

博士の聽
覺

聽覺の鋭敏は、また博士が音曲の上達に與つて力ありしものである。電話が不明瞭で、何人も要領を得るに困難を感じる時、博士が聽話器を手にすると可成り判然と先方の話を聞きとり得るのが常であつて、従つて博士は音響に對しては非常に注意深い。此のヨツプは好い音を出すと、此のナイフは物に觸れて快い響を發

博士の健康は日本文明史上大なる慶祥事

すると云つて、博士はそれを聴きわけて愛玩されて居るほどである。

博士の健康が斯く好良であつたことは、博士のために大なる幸福であるとともに、我が國文明史上眞に喜ぶべきことである。博士が一身を挺して、善く後世に傳ふべき幾多の大事業に當るを得しは、博士に此の健康あればこそと謂はねばならぬ。然も斯かる健康が六十年の久しきに亙つて終始一貫して支持せられたことは、獨り博士の天賦の資質のみに歸するを得ない。そこに大なる教訓の存するなくんばあらずである。

二、過度の愉快を貪らず

健康を羸弱

それ人の生るゝや、敢へて強壯の質を有するに限らざるも、また必ずしも羸弱なる者のみではない。而して性來弱き體質の人も養生を重んじて、後年健康者に譲らざる體軀を有するに至るあり、一方また長じて自ら節するところなく、ために遂に天與の健康體を毀損して二六時中、藥餌に親しみ、再び恢復の望なきの例、世に甚だ尠しとせぬ。博士の今日ある、其の生れながらの抗健と云ふよりも規則正しき生活をもつて補つたと云ふが適當であらう。世の多くの人の如く、強壯なるに委せ

博士今日の健康を有する所以

恩師ダイ
ヤーの言

て攝生を輕んずるやうなことは一日といへどもなかつたからである。
博士會つて英京に恩師ダイヤー氏を訪ねしとき、氏は曰く「君は非常に若く見える、
定めて健康でありませう。それは結構です」と。博士これに應酬して「自體は幸に
健康です。公務の事で無理を致しますことがありますが、過度な愉快は取りませ

博士曰く
「過度な
愉快は取
りませ
ん」

んと。燭を秉つて夜遊ぶは人情の常とするところ。博士の克己心の勁きや斷と
して有らゆる誘惑を却け、快樂の度を超過するを許さずして保身の工夫に専らで
あつた。其の健康を維持して、恩師のみならず、苟も博士に面接せし者をして盡く
「非常に若く見える」に一驚を喫せしめしめし、また所以ある哉と謂はねばならぬ。

三、寡欲澹白の資

博士が肉
體的慾望
に澹白な
る所以

然も斯くの如き養生は、ひとり克己心の鞏固たるの然らしむるのみでなく、博士が
肉體的慾望の勝れて澹白なるにもよるのである。世に博士の如く精力絶倫にし
て博士の如く寡慾冲淡の人は稀なり。これ恐らくは博士が幼少時代より艱苦に
育ちて、自ら人格の洗練せられたると、其の専門の業に專にしてまた他を顧みるの
暇なかりしより所謂慣ひ性となつたものであらう。

修學時代の質素な
りし生活

月給にす
ら手を着
けず

金錢に寡
慾なる博
士はまた
食慾にも
無頓着

其の一例を擧げむ乎。少年時代より博士の修業の費用は、主として明治初年以來下附せられし家祿により、家に餘裕の存するなかりしは勿論である。而して大學に入りて後、叔父違舟翁の倒産は博士の家政に大なる打撃を與へ、殊に博士は卒業間際に指を患ひ、後に入院治療費などの必要に迫られて借金は二百圓を超へるに至つたのである。當時の二百圓は可成り大金であつた。全快後の博士は此の借財を負うて、京都府御用掛を拜命した。待遇は僅に准判任官で月給四十圓に過ぎない。併しながら博士は此の月給にすら、殆んど手を着けなかつた。博士は着任早々、琵琶湖疏水路の測量に従事し、又或は府知事に隨行して屢東上する等の關係から旅費と日當とが餘分に與へられたから、これだけで獨身の博士の生活には充分であつた。故に月給は、其の全額を當時東京に在住しつゝありし母堂に送り、従つて彼の借財も一年を超えずして償却するを得たといふ。而して過度の愉快は取らないと云ふ博士の節制は、博士の一生を通じて、金錢の必要を尠からしめ、以つて六十年史を擧げて、清廉潔白の龜鑑たらしむるに至つたのである。

第二の例として金錢上の慾望冷淡なる博士の食物の嗜好さへもまた澹白であることを記さねばならぬ。博士の食事はすべて夫人まかせて、すこしも小言を云つ

大正時代の
挿話

たことはない。これは大正時代に入つてからの挿話であるが、或る時、博士夫妻は鳥鍋で食事をしたゝめて居たが、夫人は鳥を煮ながら「すこしうす過ぎはしませんか」と尋ねると、博士は「もう少し厚う切つた方がよからうかね」と返辭をしたので、夫人は可笑さを堪へつゝ、「お汁じゆの加減を伺つたので御座います」と云ふ。博士はやつと氣がついて、「あゝ左様か、もう少し濃くして貰うか」と云つたとのことである。その時側にありし幼年の令嬢の曰く、「お父様のお食事は母様次第よ」と。

日常生活
は夫人委
せ

有らゆる事物に、細心の觀察と考慮を盡して一點一劃苟もせざる博士が食物に對する無頓着斯くの如しである。否、嘗に食物のみでなく、日常生活の實際に就いては、⁽⁴⁾冲澹寡慾、凡べて夫人まかせにして、博士は毫も意とすることはない。古諺に云ふ、自ら奉ずるに薄き者にして始めて他人の事に盡すに厚きを得と。宜なる哉、博士は學術のために、また人のために圖つて止まず、其の必要を見るごとに財を支出して、毫も惜むの色なく、今日、博士の資を受けて社會に名を爲せる後進學徒は稀ではないと傳へられて居るのである。

自ら奉ず
るに薄く
他人の爲
めに盡す
こと厚し

(5) 博士が明治三十四年十二月四日の日記に次の記載がある。「公債證書額面壹千百圓を京都帝國大學に寄附し、創立壹百年期まで利殖して之を適當に使用することとせしめて寄

附願を差出す。折柄ポケットに入れありし時計を見むさし、其の装の破れあるに心づき糊にて修理す」と。博士わ自己に奉ずるの薄き概れ此の類である。